

記録することの可能性：震災と建築史（1）

2011年10月6日（木）13：00～17：30
東京大学生産技術研究所 食堂棟2階R 5

第1回 村松伸（東京大学生産技術研究所／総合地球環境学研究所）
「開講の趣旨：建築史と記録すること」
中谷礼仁（早稲田大学）
「アノニマス・アーキテクツへ向けて アーカイブとしての環境」



講義の様子

受講者自己紹介・3.11は何をしていたか

- ・村松：3月11日は内藤廣先生の退官記念パーティに向かっている途中、中央線の電車内で被災した。京都の地球研でも働いているが、関心が薄く、濃淡の差を感じた。今回の震災は当事者意識が高い。自分が専門家として何かしなくてはという思いがあり、この授業を始めた。建築史はほとんど何も出来ないのでは、ただどなにかやらなくてはいけない。記録することの可能性、問題点を考えていきたい。
- ・島（村松研）：被災地を記録することについて、他に人と考えてきたいと思い、参加した。3月11日は内藤先生の講演会に行こうと思い本郷三丁目の交差点にいた。
- ・野口（野城研）：建築生産、サステナビリティに取り組んでいる研究室に所属し、環境と開発について研究する予定。研究室のプロジェクトやボランティアで、大槌町に8月と9月の2回訪問した。日本でおきている問題に対してどうするばよいかを考えていきたい。3月11日は家にいた。
- ・葛西（太田研）：研究室で気仙沼の唐桑地方に3回ほど訪問した。大槌町と比較して考えたい。3月11日は内藤先生の講演会に行く途中、電車の中にいた。
- ・井上（伊藤研）：3月11日はローマにいた。海外では、震災より原発のほうが取り上げられていた。建物の実測を行っているので、記録することの可能性について向き合っていきたい。
村松：実測も記録。しかし惰性でやってしまうところがある。記録することの意味が問い直される。
- ・岡村（村松研）：被災地を対象にして博士論文をで書こうと思っている。津波からの回復力や、そこに住み続ける意味を解き明かしたい。3月11日は仕事で茨城にいて、常磐線が止まっていたのでホテルのロビーで一泊するなど、茨城県の方には非常にお世話になった。そうした経験もあって、被災地に対して自分の出来ることを通してなんらか恩返しができればと考えている。阪神大震災の時も被災して、震災との縁を感じている。
- ・近藤（村松研）：記録について関心があり、この講義に参加した。3月11日は入学前だったが生研に訪問し、みなと一緒に避難した。阪神大震災の時は小学生だったが、揺れが大きかったのを覚えている。
- ・石（村松研）：3月11日は本郷の図書館にいた。大きな地震は初めてで、驚いた。震災と建築史はどのような関係があるのか考えたい。
- ・ドン・チョイ（村松研研究員）：カルフォルニア州立大学准教授。以前から地震と建築に興味があった。カルフォルニアにも地震がくる。3月11日は、学生を連れて日本に行く準備をしていたところだった。歴史に何の意味があるのか考えていきたい。
- ・篠本（西出研）：阪神大震災のときは京都に住んでおり、寝ていて気付かなかった。3月11日も、金沢から帰ってきたばかりで寝ていた。東北に母方の実家があり、連絡が取れなくて焦った。研究室では、これから大槌に取り組んでいく予定。
- ・田口（村松研）：福島県の須賀川市に滞在し、修士論文を書いた。大槌町に訪問したとき、町の人と歩いて見出すよいところが見えなかった。3月11日には神保町のビルにいた。その日は自分の家族や親しい

人のことしか考えられなく、翌日頃から福島や東北のことを考えられるようになった。被災地に対してアドレナリンが出ている。落ち着いて記録することの可能性について考えていきたい。

- ・周（大月研）：震災の時は家にいた。木造のアパートでかなり揺れた。ずっと東北に行って何かしたいと考えていた。大月研では仮設住宅について取り組んでいる。
- ・三村（村松研）：インドネシアのGISの研究をしている。自分の欲望だけで動くのではなく、誰のためかということが直結した調査をしていきたい。3月11日は生研にいた。これは本当に危ないのではという危機感があった。2004年のスマトラ沖地震の方が印象に残っている。自分は何も出来ないという不甲斐なさがあり、感情的に動いている。

第一回大槌町調査のビデオ上映

講義について

- ・鍵概念
 - 時間軸・・・過去、現在、未来という時点を。どう相互に結ぶのか。
 - 記録する・・・脆弱な力しか持っていない。誰が、何のために、どうやって、誰のために、いつ、どこで、なにを、記録するのか。実測も意味を考えないとタブーになる。
 - 利用する・・・記録した事象を、どのように利用するのか、どのように現場に活用するのか。
- ・講義
 - ゲスト講師による5～60分の講義の後、30分ほど議論の時間を設ける。ディスカッションを受講者持ち回りで担当し、議論の流れを設定する。記録するとは、時間とは、利用するとはどういうことが、意見がまとまればと思っている。持ち回りで講義の記録を取る。
- ・フィールドワーク
 - 12月8日（木）～12日（月）に大槌町にてフィールドワークとまとめ発表会。

中谷礼仁：「アノニマス・アーキテクトゥへ向けて アーカイブとしての環境」

自己紹介

建築史ではなく、時間の流れを扱うテクノロジーとしての歴史工学と呼び専門にしている。最近では、瀝青会という今和次郎『日本の民家』に掲載されている民家を全て突き止める活動を5年間行う。

本日の資料であるwebページ（「古凡村調査開始（文化財の確実な継承と地域活性化活用のための防災指針の作成と普及）中谷研究室班」
<http://wp.me/p1C7Gj-2a>）は古凡村調査の研究概要書。

研究室でPicasaアルバムをつくっている。何も考えずに撮った写真を「駄写真」と呼び、GPSタグをつけて何も考えずにアップしている。あとから意味が出てくるだろうと。

中谷礼仁先生

To Anonymous Architects：無名の建築家集団、これ自体定義矛盾なのだけれど、そんな集団をつくろうという動きを起こしている。



東日本大震災でどのように記録するか

0．震災時何をしていたか

3月11日は、建築会館で理事会に参加していた。
しばらく湘南で休憩していた。少し落ち着いてから行動開始。

1．計画者の非常時行動のケーススタディ分析

吉阪隆正研究室による伊豆大島元町復興計画提案

- ・昭和41年1月の大島大火の直後に再建案を作成　しかし、現地関係者や都と折衝
- ・再建第二案提出、9月の東京都の区画整理後の復興計画を委託
村落構造に応答したデザイン

- ・壇状集落の提案
- ・区画整理で消えた神社の参道を新規舗装・・・儀礼上の問題をリサーチした上で計画
- ・高地に水を貯め、公共の水取場である「水取山計画」

コルビュジエの提案

ドミノハウス：1914年の第一次世界大戦後フランドルに疲弊地区に向けて提案された復興住宅では？
 ペサックの集合住宅：住民による「伝統化」その後、元の状態に復元
 シトロアン住宅：ドミノハウスの展開
 第一次世界大戦後における、陥没した無残な土地のとの決別、建物の土地からの開放
 地域性を離れるというひとつの大きな特徴を支えているのでは
 モダニズム建築の一側面

2. 視点の獲得 日常への復帰とは非同期への復帰である

震災におけるそれぞれの問題は予知、警告されてきたこと

通常は個別的に動いていた、同期しない問題群が一気に動機した（負の圧倒的連鎖）

問題群を、従来の範疇ではなく集合論的に再編成して、
 可能なかぎり非同期をうながすためのパラダイムを提示する
 そのためには地味な復興という方向性もあってしかるべき。

中谷の取り組み

- ・今年度より「古凡村」調査（環境＋集落＋共同体）
- ・来年度よりプレートテクトニクス沿いの世界踏査

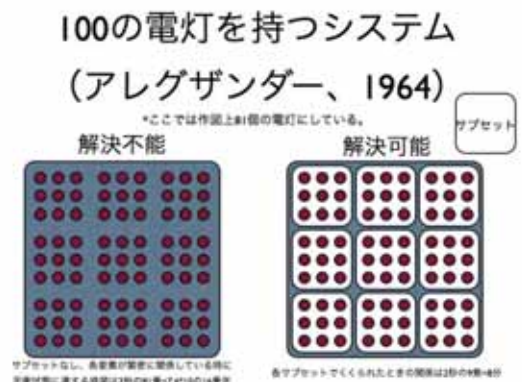
100の電灯を持つシステム

（クリストファー・アレグザンダー、『形の合成に関するノート』より）

互いに関連性のある素子からなるシステムを
 適切に平衡状態に導くためのモデル

100の電灯が全て同期しているのではなく、100の電灯に
 接続関係があるにしても、一つが10の電灯を含む10の主
 なサブシステムを想定すると、適切な時間で平衡状態に導け
 る。

震災でいろいろなことが同期している状況を、サブセット化
 することが必要。



電灯のサブセット化（中谷礼仁作図）

3. 北上川、茅葺職人復活の話（『建築雑誌』2011年11月号にて柴原聡子氏がルポを執筆公開予定）

茅葺き会社の社長の事例

東京滞在中に現地の会社が津波の被害にあう

新しく土地を借り、一ヶ月で復活宣言。

日本滞在中のモンゴル人学生を通じて、仮説住居としてパオ輸入

工学院大学後藤治教授と共に、本設住宅着工中

行動力のある人がネゴシエーションしながらいろいろなことを生み出している

レジリアンス（回復力）は、客体やシステム自体には存在しない。それを動かす人間の存在が不可欠。

浮遊するコンテクストを新しくつなぎ合わせることのできる、主体的レジリアンティストの重要性

レジリアンス（回復力）は、Redundancy / Resourcefulness / Rapid / Robust をもつ主体（レジリアンティスト）にこそ存在する

4. アノニマスアーキテクト 古凡村から学ぶ

環境条件と建造物、共同体のあいだに動的平衡性（ホメオスタシス）が古くから持続し、現在においても有効に継承されている地区・・・「持続的環境・建造物群継承地区」、瀝青会（今和次郎『日本の民家』

再訪のために組織された集団)の次の標的

地形や地質といった、集落の基盤である「環境」と、それに適応する集落の「構造」、またそこに展開される「共同体」を一体のものとして捉える必要がある。

例：今和次郎『日本の民家』を訪れた際の経験で言えば、糸魚川沿岸のもと舟小屋や入会地を持つ集落、吹浦地区の集落変遷構造など

「古凡村」(観光地化されていない、古い平凡な村)の調査

古凡村の抽出方法

平安時代に編纂された地名の本『和名類聚抄』と地質図を重ねあわせ、古代より存在する村を特定

昔の硬い地盤と沖積層のあいだ、傾斜角が急変するところに古凡村が分布していることが分かった。

【質疑・ディスカッション】

岡村：平衡という場合に、マクロでみると環境が持続し、ミクロでみると人やコミュニティ、建物が移り変わるという理解で良いか。

中谷：昔からの集落構造は、結構残っている。変わっているのはその周りの入会地や田んぼ。彼らの職業の変化によって用途が変わっている。所有者にとっては建売住宅も「生産地」、善し悪しは別にして水田と同じカテゴリととらえることも可能。

村松：『和名類聚抄』に載っているものしか残っている村はないのか。

中谷：日本書紀を使おうと思ったが、仙台ぐらいまでしかなかった。これは少なすぎた。社会が一段落した平安時代のものを使おうと担当学生が提案した。もちろん他にも多くの古凡村が残っていると思うが、目的はそのすべてを踏査するわけではなく、サンプリングと効果的な考察と普遍化。その意味ではすべての古凡村を回らなければいけないという見方はむしろ不合理。様々なフィルターをかけて、価値ある訪問可能な集落をみつきたい。現在だけでも140もの候補があるが、それをすべて踏査する必要はないと考える。

村松：地味と言っておきながら実は地味派手だよね。『和名類聚抄』は地名だけでは、1000年の幅がある中、空間的にどう一致させるか。

中谷：学問というプラットフォームにいるわけなので、すべてを自分が行わなければいけない理由はむしろおかしい。先行研究者による定評のある文献を信頼する。要は先行研究を担保とし、それを前提とした上でさらに進めなければ、いつまでたっても学問は進みません。

岡村：過去に千年持続学フォーラムで、中谷さんは「かたち」をキーワードに都市を読み解いていたが、古凡村のような農村を対象とした場合にはどのあたりに「かたち」が表れてくるのだろうか。

中谷：マクロなレベルのほうがより変わっている。古凡村調査で、村長さんに地図を見せてもらった。行政単位より小さい地区単位で利害関係が生じており、それらエリアを担当する区長の気質は伝統的であった。建築学科は行政からトップダウンでその土地の行政単位から介入していくが、むしろしたから上に向かうという方向が少なすぎるのではないかと思った。地区の安全だけをサブセットとして考えるコミュニティ・アーキテクトがいてもよい。地区間で利害関係が生じれば話しあえばよい。そこからおもしろいデザインが生まれれば。

岡村：大槌町はこれから更地にしてまちの復興を考えていくことになるが、新しいまちをデザインする際に、どのようにすれば伝統的な空間がもつような豊かな空間を作り出すことができるかとお考えか。

中谷：行っていないのでわからない。空間は現地に行ってみないと語れない。形がすべて固有の条件。また防災は町会や地区レベルだと、ハード的なものではなくソフト的ネットワークとして存在する傾向が強い。その意味からすれば防災は、土着の文化を基盤にしないと成立しない。防災=土木と考えていたことを、今回の震災で根底から考え直せる機会をもらった。

島：茅負職人のようなアクティビストは何人くらい現れたか。周辺の人はどう受け入れたのか。

中谷：何人という定量的には見られない。僕のレジリアンスが、ネットワークを発見させたというしかない。その意味では偶然の遭遇なのだが、彼らの行動を社会的に意味ある妥当性を備えたものとして考察することができたら、それはサンプルとして応用、比較可能な価値を持つと考える。現地の様子は自分で行って確かめるしかないと思う。

田口：須賀川あたりの地区についてどう思うか。

中谷：須賀川は古凡村だと思う。あのようなところをどうしていくか考えるのが大事。

村松：中谷さんは、非同期的と言いつながらやっている活動は同期的。いろんなものを一緒に見ている。僕たちはジャカルタのプロジェクトに取り組んでいるが、全部見るわけにいかず細かく見ている。いくつかの単位に分けながら進めると解決できる。その中に複雑な関係がある。

中谷：環境、構造、共同体の単位に分けた。古凡村調査で、同期させなかったのは津波と放射能。今回の震災で一番大事な要素の二つを外しているのです。その要素が大きすぎるので、他の要素の意味が見えにくくなる。

村松：僕たちは、建造環境、自然環境、社会環境と分けた、視点は同じで、共鳴するところがある。

中谷：いま、何をやれば一番効果的で意味があるか、他の方々の尊敬すべき行動を参照しつつ、むしろ別の視点を確保するようなフォーカシングが必要。

村松：時間軸、記録する、利用するの3つの鍵概念についてはどのように考えているか。

中谷：時間軸、について。その研究者の想像力に関わってくる。頭が良くても短期的な人は歴史家には向いていない。今晚なにが食べたいではなくて一週間後何が食べれるかを考えられるような思考は大切だと思う。

記録する、について。記憶は主観的、記録は客観的なものなので、基本的に、記録的に扱われない場合の「記憶」という言葉を信用していない。逆に記録をしておく、写真の片隅とかに、自分が意図していなかった別の情報がある。テーマを持って記録したものは作品だが、日常的なログをどこかに走らせておく。最初に言った「駄写真」はそういう意味がある。

利用する、について。歴史がどのように役に立つかはその人による。可能性は常に考えるが、決まった役立ち方というのは考えていない。

岡村：アノニマス・アーキテクトのプロジェクトは修理をしているか？

中谷：壊れていなければ調べて学ぶ。壊れていれば、計画し、地場の人に直してもらおう。

井上：震災以後もヨーロッパの調査をしており、外からの視点で見ている。土地の所有の仕方が日本と異なり、災害の概念がほとんど無い。

葛西：住宅より早く漁業が復活した被災地があるが、復興のために道・住居・漁業の3つを同時に考えなければならぬという話が出ている。どうやればいいか？

中谷：道・住居・漁業もサブセットである。何かそのセットの集合で考えることに不具合があるのなら、異なる名前のサブセットをつくらねばならない。どうしたらスマートに結合できるかはたとえばアレグザンダー『形の合成に関するノート』を参照してください。

篠本：「非同期への復帰」という概念をどう思いついたか？

中谷：震災直後、しばらく湘南にいたときに、現実と切り離されて落ち着いた。あと、友人で思想的先達の岡崎乾二郎氏がいつも言っている基本条件としての非同期性は常に気になっていた。全部考える必要はないのだと楽になった。古凡村に関してはかなり方向性を絞り、ワンクッション置いている。非同期的同期。

近藤：なぜ震災に貢献しようと思ったのか？

中谷：東京に住んで、学会員や教員という社会的ポジションにあるから。西日本や海外に逃げる人を否定しない。

村松：私は、人として、と同時に専門家としてなにが出来るのか考えたい。

(匂坂さんに)個人的にボランティアに行っているのはなぜか？

匂坂：見てみたいから。自分が見てどう思うか確かめたい。

野口：行ってみて力になれることはわずか。被災地の人のエネルギーに触れたい。

村松：行ってみるとオープンになれる。逃げてしまうとここで終わってしまう。

中谷：負のエネルギーというものもあるし、まあ長期的に生き残れるように、精神も身体も健全が第一で考えましょう放射性物質は従来の歴史の範囲を越えているので困ったなあと思う。

村松：逃げられる人は逃げている。逃げられない人が生きている。拒否しないで考えることが大切。